

## 長期入院を要した児および障害を有する NICU退院児の現状－当院退院児のアンケート調査より－

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅  
ケアシステムに関する研究)

研究協力者 板橋家頭夫

共同研究者 木口 雅尋、今井由美子

呉 有晃

**要約：**葛飾赤十字産院新生児未熟児センターに90日以上長期にわたり入院し、明らかな異常を認めずに退院した児、および入院期間の長さに関わらず神経学的異常を中心とした障害を有したまま退院した児について、両親へのアンケート調査を行なった結果、入院施設ばかりでなく、地域医療や地域保健サービスを含めた包括的なシステム作りが欠かせないと考えられた。

**見出し語：**長期入院児、障害児、現状と問題点、アンケート調査

**研究目的：**NICU退院児、特に長期入院を要した児や障害児の退院後の問題点を明らかにし、新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムの確立のための一助とする。

**研究方法：**昭和62年1月より昭和63年12月の2年間に葛飾赤十字産院新生児未熟児センターに入院した児で、90日以上長期入院を要し、退院時明らかな異常を認めなかった児、および入院期間に関わらず神経学的異常を中心とした障害を有したまま退院した児、計83名の児の両親にアンケート調査を行なった(回収率78%)。

**結果：**① 退院時の不安は全体で69%にみられ、退院時の障害の有無による差は認められなかった。次に、退院時の不安の解消を目的とした母子入院や試験外泊・試験外出について意見を求めたところ、89%が肯定的意見であった。

② 退院後の育児についての不安としては、児の発育・発達面、疾病、栄養に関するものが多かった。疾病罹患時には周辺医療機関への受診希望が多いが、近医の受診を希望しても、未熟児であったり障害児であったりすることを理由に断られるケースも存在した。

③ 地域保健サービスとの関わりでは、保健婦

の訪問指導を希望したのは約 2/3 と低く、保健所の受診率も約半数と低率であった。保健婦の家庭訪問の時期は27%が退院後2週間以内で、3週間以内では約50%であった。

④ 要訓練・療育児を持つ両親の訴えとして多いものは、児の将来に対する不安や、育児疲労、自分の時間が持てない、イライラ、生活苦、冠婚葬祭・家族が病気のさいなどに一時的にでも児を預かって欲しい、などであった。

考案：今回のアンケート調査をもとに、NICUを退院した長期入院児や障害児が円滑に家庭生活を送るようになるためには、現状では地域保健サービスをより積極的に利用し、加えて周辺医療機関との連携をより密接にすることが

重要であると考えられる。しかし、障害児にとってより望ましい形態としては、昭和61～63年度「新生児管理における諸問題の総合的研究」で提言されたような地域単位の24時間緊急体制再入院受け入れ体制、家族指導、長期集中治療体制さらに障害児保育・訓練・リハビリが可能で、NICUと家庭の間に存在する中間施設としての発達療育センターの設立が必要ではないかと考えられた。

(今回の研究・調査にご援助頂きました葛飾赤十字産院新生児未熟児センター長井美枝子、宮下直美、森山マチ子、志賀はるみ、大海千尋各諸氏はじめスタッフ一同、および小児科外来小島公子氏に深謝致します。)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:葛飾赤十字産院新生児未熟児センターに90日以上長期にわたり入院し、明らかな異常を認めずに退院した児、および入院期間の長さに関わらず神経学的異常を中心とした障害を有したまま退院した児について、両親へのアンケート調査を行なった結果、入院施設ばかりでなく、地域医療や地域保健サービスを含めた包括的なシステム作りが欠かせないと考えられた。